令和２年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

在宅療養 ALS 患者さんとのリモート交流

（ALS:筋萎縮性側索硬化症）

代表者　　川上聖加（医学部看護学科 4 年）

１．目的と概要

本プロジェクト事業は、2018 年に医学部サークルとして創設したボランティアサークルにおいて、2019 年度に「在宅 ALS ボランティア班」を開設し、在宅 ALS 患者さんの日常の心の支えになることを目的に、訪問ボランティアを行ったが、With Covid-19 下で継続的に在宅患者支援を行うための新たな学生ボランティアモデルの事業提案である。

人工呼吸器装着者である ALS 患者さんやそのご家族は、コロナ禍で外出の機制が厳しくなっていると考えられ、人同士の接触を避けたリモートでの交流が、少しでも孤独感や孤立感を軽減して社会とのつながりを感じられるものにできたらという思いから始まった。

リモート交流は遠方、異分野の方との交流が可能であり、患者さんやご家族の新しい世界の開拓に貢献し、在宅療養における QOL 向上を目指し、活動している。

看護知識のある看護学生による活動として、参加者自身も看護観を考えさせられる活動となっており、大学生と地域の交流促進の効果も得られる活動である。

２．実施期間（実施日）

打ち合わせと顧問による指導	令和 2 年 11 月 11 日
リモート交流実施日	令和 2 年 11 月 23 日、令和 2 年 12 月 11 日

３．成果の内容及びその分析・評価等

本プロジェクト事業は、令和 2 年 11 月 11 日に事前打ち合わせを行い、令和 2 年 11 月 23 日に第１回交流、令和 2 年 12 月 11 日に第 2 回交流を実施した。交流会では、誕生日会やクリスマス会、互いの近況について対話を行った。

交流会ごとに学生と療養者さんにそれぞれアンケートを実施し、良かった点や改善点について参加メンバーにフィードバックし、実施方法の修正と学びに繋げた。第１回交流会後の療養者さんのアンケートでは「その季節の行事や風物詩などの飾りつけや歌、簡単な合奏などを披露してほしい。」という意見をいただき、第２回に学生がサンタクロースの帽子を被って参加するなど、視覚的な面から季節を感じることのできるよう工夫した。

第２回交流会後の療養者さんのアンケートでは、「歌や視覚に訴える飾りは心情的に交流を深められた。」という意見をいただくことができた。一方で、検討してほしいことでは、「一人ひとりの関わりを深めることができなかったことが残念だった。」「患者本人とのやり取りができる投げかけも増やしてほしい。」という意見があった。

また、学生のアンケートの結果でも「もっとお話がしたい。」「もう少しお話がしたかった。」という意見があり、学生・患者さん共に一人ひとりがより深く関わりたいと感じてい

ることが分かった。そこで、参加人数やコミュニケーションの工夫で、学生も患者さんも深く交流できるようにプログラムを改善していく必要があると考える。

他にも、学生が学べる機会となるような交流会や、療養者さんの希望に沿った交流会を実施するなど内容の質を高めることで、両者が楽しめる企画を目指すことも重要であると考える。

また、交流を通して「人と会う機会がないからこうして話せるのが嬉しい」などのお声を頂き、本プロジェクト事業により、感染リスクの高い療養者さんが外に出ることなく社会との繋がりを持つことのできる有効的な方法であると再確認できた。

さらに、療養者さんへのアンケート内容から「学生と話すとフレッシュな気持ちになる」など、療養者さんと家族の気分転換の機会となり、メンタルケアの効果もあることが考えられる。それを学生にフィードバックすることで学生が喜び、主体的に参加することにも繋がった。

実際に実施できた回数が 2 回と少なく、分析していくには回数が少ないが、これからも継続的に行い、徐々に改善していきたい。

令和 2 年 11 月 23 日の実施の様子①　　同　②

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

今回のプロジェクトを通して、令和 2 年 12 月 24 日に医学部 HP や令和 3 年 3 月 1 日に朝日新聞で掲載していただき、多くの人に自分たちの活動について発信することができた。また、令和 3 年 2 月 17 日に医学部教授会にて医学部長から代表者への学部長表彰も頂いた。

これらのことから、私たちの活動は香川大学医学部ならではの活動を提案し、学生が主体となった社会貢献へと繋がる第一歩を踏み出せたのではないかと感じている。

→(左)大学からのプレスリリース

→(右)朝日新聞記事 WEB 版にも拡大記事掲載

News Release　香川大学 Kagawa University

令和2年12月7日

「医学部看護学科・臨床心理学科学生の在宅 ALS 患者さんとのリモートボランティア」を行いました

医学部ボランティアサークル（代表　川上聖加・藤崎美咲）は、2018 年度に創設され、日本 ALS 協会香川県支部（支部長　岩本豊）の外出・福祉ガイドなどの交流活動や研修会のボランティア、カンボジアの国際ボランティア活動などを行っています。2020 年 3 月から、Covid-19 感染拡大防止のため、新入生へのリクルート活動のほか、患者ボランティアも自粛してきました。

一方、ALS 香川県支部の在宅療養の方々も人工呼吸器を装着しているハイリスク状況であることから、患者同士の交流や学生との交流も中止せざるを得ない状況が続いていました。

香川大学学生支援プロジェクトでは、香大生の夢チャレンジプロジェクトを実施していますが、このボランティアサークルでは リモートによる在宅 ALS 患者さんへの交流ボランティアを企画し、プロジェクト経費を獲得し、支援代表者の情報の元、リモートミーティングを実施させました。

看護学科・臨床心理学科学生 15 名が集まって企画を練り、うち 8 名が 2020 年 11 月 23 日(月)に岩本氏とのリモートミーティングを実施しました。約 30 分のミーティングでしたが、次回、第 2 回を他の患者さんに拡大して 12 月に実施する方向で患者会サイドとの調整を行うことになりました。学生らは貴重な経験であったと「短い時間でも人のために行動できることを知った」などの感想を述べていました。以下に実施学生の様子を紹介します。

患者さんの誕生日を祝う目的で行いました。　患者さんと学生 3 グループ

三密を避けるため少人数で別教室に分散しタブレットを使用しました。

香川大医学部ボランティアサークル

キャンパス楽苑

交流深め知るALS患者

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

コロナ禍の中、直接的な介入にこだわらず、リモートという新たな手法で、在宅で療養されている ALS 療養者さんの日常生活の中に変化を与え、新たな楽しみを作ることで、学生自身も手ごたえを感じ、各々の看護観を見つめ直すきっかけとなったように感じる。

参加学生の感想として、「コロナウイルスが猛威を奮っている中で、できないことがあるのも事実だが、今だからこそ自分に何かできることがあるのではないかと考えさせられた。」「ALS については座学で学んでいたが、実際に関わらせていただくことでコミュニケーションの仕方や介護者のサポートの大切さなど理解を深めることが出来た。」「リモートで行うコミュニケーションは、相手の繊細な表情の変化を捉えることや返答に時間を要したりすることが難しく感じた。しかし、沢山の人が患者さんと交流できることはリモートならではだと思った。」など様々な意見が見られた。

コロナ禍で人との関わりが薄れている中、孤独感や孤立感を軽減して社会とのつながりを感じられたのは療養者さんやそのご家族だけでなく、参加学生も同様な効果が得られたと考えられる。

交流後のアンケートのフィードバックにより、参加学生のボランティア意欲が向上するなどの効果もあった。アンケートの感想にもあった通り、リモート交流という新たな試みにより、限られた環境や時間のなかでもコミュニケーション方法を工夫することの難しさを各々に実感し、医療職者として必要なコミュニケーション能力や奉仕の心など、「今、できること」に着目して行動する力を参加学生全員が身に着けることができたと感じる。

令和 2 年 11 月 11 日の打ち合わせ参加学生

６．反省点・今後の展望（計画）・感想等

2 回の交流を経て、実際にまだまだ参加したいと思っている療養者さんが多くいるが、サークルとして活動しているため、部活動停止期間はリモートであっても交流が禁止され、思うように活動できない期間があった。今後は交流する ALS 療養者さんとボランティアの人数を増やし、引き続き行っていくことが重要であると考える。そのため、今後の展望（計画）として、

①部活動禁止期間が終了次第、第 3 回リモート交流会を継続して行うこと

②メンバーの募集を引き続き行うこと

③学生の参加人数を工夫し、患者さんが一人一人の学生と時間をかけて交流できるようにすること

④瞬きで答えられる二者択一や○×の質問、しりとりゲームなど療養者さん本人が参加しやすく楽しめるコミュニケーション方法を考えること

の 4 つを挙げる。

しかし、Covid-19 の影響を考慮し、対策としてリモートでの交流に切り替えたにもかかわらず、活動が禁止されてしまったことに対しては悔しい思いも残り、今後の対応を検討する必要があると考える。

今回の機会を活かして在宅で療養されている ALS 療養者さんとの交流を広げ、今後も、少しでも療養者さん本人とそのご家族の日常の心の支えになれるように活動していけたらと考えている。

７．実施メンバー

代表者　川上 聖加（医学部看護学科 4 年）

構成員　石宮 裕子（医学部看護学科 4 年）　甲斐 大介（医学部看護学科 4 年）
櫻井 菜々乃（医学部看護学科 4 年）　忠津 吏湖（医学部看護学科 4 年）
中島 望美（医学部看護学科 4 年）　藤原 綾香（医学部看護学科 4 年）
磯崎　未来（医学部看護学科 3 年）　松岡　みゆ（医学部看護学科 3 年）
上原　美和（医学部看護学科 2 年）　北本　晃大（医学部看護学科 1 年）
木村 穂乃花（医学部臨床心理学科 3 年）
仲村渠 智紗都（医学部臨床心理学科 3 年）
モストファ ライサ（医学部臨床心理学科 3 年）
多田 和貴（医学部臨床心理学科 2 年）
安田 優紀（医学部臨床心理学科 2 年）
植松 彩也（医学部臨床心理学科 1 年）
中村 仁胡（医学部臨床心理学科 1 年）

８．執行経費内訳書

配　分　予　算　額		200，000円		
執行経費（品目等）	数量	単価(円)	金額(円)	備　考
タブレット	4	36，080	144，320	
通信機器	1	29，800	29，800	
iPadスタンド	4	1，980	7，920	
ヘッドセット	4	2，335	9，340	
SDカード	1	8，620	8，620	
合　　計			200，000	